

価値実現の感情および理由の評価が価値変容に及ぼす影響

Value changes as an effect of assessing feelings about and reasons for actualizing particular values

廣瀬春次¹⁾

Haruji Hirose

Abstract

This study investigated factors influencing value change. The subjects were divided into two experimental and one control group. Firstly, all subjects were asked to rate the importance of each value (values pre-test) and the intention to enact the behavior (behavioral intention pre-test). Next, the subjects in the feeling-assessment experimental group were asked to rate the degree of pleasure they would feel in actualizing each of the value items, and the subjects in the reason-assessment experimental group were asked to rate the level of their conviction for reason that actualizing each value item is important. The control group rated the degree of inequality women suffer in actualization each value item. The subjects of all 3 groups completed a values and behavioral intention post-test, and again two months later. It was found that the assessment of both feelings and reasons cause changes in the rating of most items in immediate values post-tests and of a few items in the values post-test 2 months later, but the control assessment did not, and 2 months later in the feeling-assessment experimental group, value-behavioral intention consistency became strong in several values. It was argued that analyzing one's own values may result in some disturbances in values cognition.

要約

本研究は、価値変容に影響する要因を明らかにする目的で行った。被験者は2実験グループと1統制グループに分けられた。最初、全ての被験者は、8つの価値項目の重要さの評定（価値プリテスト）と行動意図の評定（行動意図プリテスト）をおこなった。続いて、感情評価群の被験者は、各価値を実現する際に感じる喜びの程度を評価した。理由評価群では、各価値を実現することが重要である理由についてどの程度納得できるかを評定した。統制群では、女性にとって各価値を実現する上での不公平さの程度を評価した。3つの群の全ての被験者が、直後および2ヶ月後に価値ポストテストおよび行動意図ポストテストを行った。その結果、特定の価値の感情と理由を評価することは直後の価値ポストテストにおけるほとんどの項目の評価および2ヶ月後における2、3の項目の評価に影響することが認められたが、統制手続きでは影響はなかった。また、2ヶ月後の感情評価群では、いくつかの価値において価値・行動意図の一貫性が高まることが示唆された。著者は、自らの価値を分析することは価値認知に何らかの攪乱をもたらすと論じた。

Key words: values, value change, feelings analysis, truism, belief

キーワード：価値、価値変容、感情分析、自明性、信念

価値は、いくつかの研究（Katz & Hass, 1988; Boninger, Konsnick & Berent, 1995; Maio & Olson, 1995）が示唆するように、態度や行動に影響を与える重要な要因である。従って、それぞれの価値の重要さの変化（以下価値変容と呼ぶ）は、広範囲にわたる影響を個人および集団にもたらすと考えられる。実際、多くの事例研究が、カウンセリングを通しての人間の成長において価値変容が起こることを示唆している。

にもかかわらず、臨床心理学および社会心理学の領域において、価値変容の研究は、認知・態度・行動などの変容に比べてほとんど注目されてこなかった。今までに、価値変容に焦点をあてた研究としては、Rokeach (1973), Maio&Olson (1998), それにHirose (2004) があげられる程度である。

Rokeach (1973) は、価値変容に関して次のような仮説を立てた。1) 人の変化は、人が持っている信念

1) 山口県立大学大学院健康福祉学研究科 Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

の矛盾によって生じる。2) 認知的な矛盾は自己不満をもたらす、この自己不満が変化を起す。3) 自己不満が最も高くなるのは、自分自身についての認知の矛盾である。4) 価値は自己評価の基準なので、態度より行動変容に大きな影響を持つ。彼の研究では、大学生に価値リストに記載した複数の価値を重要さの順に順位づけさせた。その後、実験群には一般の大学生の平均的な価値順位表(自由の順位が平等より高い)を見せ、一般の学生は「平等」より「自由」が大事であると感じており、他人の自由より自分の自由に関心があると説明した。更に、人権を重視する人が「平等」の価値を重視することを示す資料も提示した。これらの手続きは、平等より自由を優先するという判断が人権を大切にしているという自己認知と矛盾し、欲求不満をもたらすことを意図したものだ。統制群にはそのような解説はされなかった。実験群と統制群に対し、実験の前と後で、価値の重要さの変化(価値変容)、人々の平等の権利などへの同意の変化(態度変容)、人権向上の協会への勧誘に対する反応(行動変容)を調べた。その結果、実験群では、価値変容は3週間後に、態度変容は3~5ヶ月後に出現した。このことからRokeach(1973)は、価値変容が態度変容をもたらしたと結論した。

Maio & Olson(1998)は、価値を文化的自明性に基づくものとして価値変容の研究を行った。自明性とは、McGuire(1964)が提唱した概念で、人々に広く受け入れられ、めったに疑いを持たれたり議論されることがないため、それらを支持する認知的基盤が欠けるような性質のものである。彼らは、態度変容を引き起こすため、態度の理由を被験者に分析させたWilsonら(Wilson, Dunn, et al., 1984; Wilson & Dunn, 1986; Wilson, Kraft, et al., 1989)の研究を価値変容に応用した。彼の研究では、全ての被験者が10個の価値の重要性のある課題の前後で評価した、実験群での課題は各価値の重要性の理由を分析することであった。一方統制群は飲み物の好みの理由を分析した。その結果、実験群のみ価値評価の変化が見られ、価値の自明性についての仮説が支持された。また、その変化は「重要でない」と「重要である」の2極の方向であった。彼らは、重要さの理由が被験者に納得できる場合とできない場合があるので、2つの方向に価値変化が生じたと論じている。

Hirose(2004)は、価値の感情的特質は、価値の隠された側面を表すというHermans(1987)の示唆、及び自己概念を経験と一致させようとする人の傾向に

についてのRogers(1940)の示唆に基づき、ある価値の重要さの認知とその価値に関わる感情的経験の不一致は、感情的経験に一致する方向に価値認知を変化させるという仮説を設定した。彼の実験で被験者は、最初のプリテストと最後のポストテストで同じ20の価値項目の重要さを評定した。この両テストの間に、実験群はそれぞれの価値を実現したとき感じる喜びを、一方、統制群はそれぞれの価値項目を女性が実現する上での不平等の程度を評定した。結果の分析には重回帰分析のモデルを用いた。即ち、もし、感情的経験の評価(実験変数)がポストテストの価値評価(依存変数)に影響を与えるなら、独立変数としてプリテストに加えて実験変数を導入することは、決定係数の増加をもたらすと予測した。結果は、実験群でほとんどの価値項目で決定係数の増加が見られるのに対して、統制群では少数の価値項目以外では増加は認められず、仮説は支持された。更に、実験群に対する3ヶ月の価値評価では、実験変数の効果はほとんど消失したが、環境保護を含む3つの価値については変化が持続した。

上記のHirose(2004)の研究では、価値変容の持続はRokeach(1973)の研究結果に比べて明確に示されなかった。この背景としては、Maio & Olson(1998)が示唆したように認知的基盤のない価値評価は変動しやすいのかもしれない。しかし一方では、自分の価値感情についての気づきは、理由分析といった認知的な内省(self-reflection)よりも価値についての深い自己理解であるとも考えられる。態度変容に関して言えば、内省が及ぼす影響については一貫した結果が得られていない。多くの研究が内省による態度と行動の一致性(attitude-behavior consistency)向上の効果を見出しているのに対し、Wilsonら(1984,1986,1989)は、内省の一種である理由分析は、その人本来の態度からの逸脱という意味でより不正確な方向(less accurate direction)に態度を変容させる可能性を示唆している。彼らの実験において、理由分析群はパズルや写真、それに恋人等に対する好悪の理由を分析した。一方、感情焦点群は、どのくらいその対象を自分が好きであるかを熟考した。その結果、感情焦点群に比べ、理由分析群では対象に対する態度(好悪の評価)と実際の行動(その対象と関わる時間等)間の不一致が大きいことが示された。同様の現象が、価値に関しても生じるかもしれない。従って、ある価値に関する感情焦点操作と理由分析操作の影響については2つの可能性が想定される。一つは、Maio & Olson(1998)が示唆するように、感情焦点に比べ理由分析の方が、認知的基

盤を与える点で、安定した価値判断へと変容させる可能性であり、もう一つは、Wilson ら (1984,1986,1989) が示唆するように、理由分析により不正確な方向に価値判断が変容し、結果的に感情焦点に比べ、態度変容が一時的なものとなる可能性である。そこで本研究では、被験者に各価値実現の際の喜びを評価させることに加えて、各価値を実現することが重要である理由を分析させ、理由分析と感情焦点という2つの内省の価値変容への影響の違いを検討する。

ところで、上述したように、Maio & Olson (1998) は、価値の重要さの理由分析による被験者の価値認知の2方向への変容は、その理由が被験者にとって納得がいく場合とそうでない場合があるからだ論じている。これは、特定の価値が重要である理由に納得した場合、実験参加者はその価値をより高く評価することを想定するものであるが、Maioらは、この納得の程度の影響を直接検討していない。また、Wilson らの研究 (1984, 1986, 1989) は、理由分析が不正確な態度変容をもたらすことを示すものであるが、納得の程度の影響については明らかでない。納得の程度が高い場合は、そうでない場合に比べ、より正確な方向に価値変容が生じ、その結果、価値評価と行動の一致性が高まるかもしれない。そこで本研究では、分析した理由についての納得の程度を実際に実験参加者に評価させ、また、RokeachやWilson らとは異なり、実際の行動ではなく一斉調査の形式で行動意図を調べ、価値評価理由の納得の程度が価値認知の変容及び価値と行動意図の一致性に及ぼす影響についても検討する。仮説は以下の通りである。

- 1) ある価値が重要である理由を分析することが、その価値の正確な認知的基盤を与えるなら、理由分析後に納得の程度に応じた価値変容が生じ、長時間持続し、行動意図の変容を引き起こす。価値と行動意図の一致性は高まる。
- 2) 価値実現の喜びに焦点をあてることで、その人本来の(正確な)価値の気づきをもたらすなら、感情焦点後に喜びの程度に応じた価値変容が生じ、長期間持続し、行動意図の変容を引き起こす。また価値と行動意図の一致性は高まる。

実験 1

方法

実験参加者 心理学を受講する一年と二年の大学生185名で、後述する不平等評価(統制)群(66名)、感情評価群(60名)、理由評価群(59名)の3群に分か

れた。

測度 この実験で使われた測度は以下の通りである。

1. 価値テスト：Shwarz (1992) の8個の動機に基づく価値タイプに含まれる指標価値の中から代表的な1項目、計8項目(①社会的権力[他者を統制する、支配]、②有能さ[能力がある、要領がいい]、③大胆さ[冒険を求める]、④自由[思想と行動の自由]、⑤環境保全[自然を残す]、⑥援助的[人の役に立つ]、⑦分をわきまえる[人生のさまざまな状況を甘受する]、⑧健康[肉体的・精神的に病気がない])を選んだ。被験者には、それぞれの価値項目に対して、「全く重要でない」、「あまり重要でない」、「どちらでもない」、「少し重要」、「とても重要」の5段階での評定を求めた。このテストは、提示順序に従って価値プリテストと価値ポストテストと命名した。価値プリテストと価値ポストテストは全く同じ内容、評定であった。ただし、価値ポストテストでは、最初のテスト実施の説明文に、人は短時間でもその判断や気分が変わることがあるので、「今のあなたの判断」をするようにという記述を加えた。この記述を追加した理由は、先行研究における何人かの学生が価値ポストテストと価値プリテストが全く同じで、回答する必要がないと判断し、価値ポストテストに記入しなかったためである。
2. 行動意図テスト：行動意図テストは価値テストの価値項目に対応して、それぞれの価値に関わる行動意図(intention to enact the behavior)を示す8項目(①特定の集団のリーダーになる、②自分の資質向上のチャンスがあれば、積極的に利用する、③目的を達成するためには、少々の危険にも挑戦する、④他者の意向より、自分のやりたいことを優先する⑤環境保護運動に寄付をする、⑥福祉のボランティア活動に参加する、⑦自分がふさわしくないなら、名誉な地位でも賞でも断る、⑧体の調子が悪い時は、すぐに病院へ行く)から成る。各行動を機会があれば実行するかどうかについて、「はい」、「どちらともいえない」、「いいえ」の3段階での評定が求められる。行動意図テストも提示順序に従い、行動意図プリテストと行動意図ポストテストと命名した。両者の内容、評定ともに全く同じであったが、行動意図ポストテストでは、先の価値ポストテストと同じ「今のあなたの判断」を求める文章を追加した。
3. 8つの価値実現項目(①他者が自分に従うような地位につく、②ある事柄について優れた能力を発揮

する, ③何事にも失敗を恐れず挑戦する, ④自由で誰からも束縛されない, ⑤環境保護のための活動をする, ⑥他の人の役に立つ仕事や活動をする, ⑦控えめで, 背伸びをしないで生きる, ⑧身体的にも精神的に健康でありつづける) に関して, 以下の3種類の評価テスト (Appendix) を作成した。(a) 不平等評価テスト (inequality- assessment test) : このテストは, 各価値実現項目に関し, 現代社会の女性にとって社会的に不平等な面があるか90秒間考え, その結果について「全く不平等でない」から「とても不平等」の5段階で評価するものである。(b) 感情評価テスト (feeling-assessment test) : このテストは, 将来ある価値を実現ができた場合を90秒間想像して, それがどの程度嬉しいかを「全く嬉しくない」から「とても嬉しい」の5段階で評価する。(c) 理由評価テスト (reason-assessment test) : このテストは, ある価値を実現することが重要である理由を90秒間考え, その理由がどの程度納得できるかを「全く納得できない」から「とても納得できる」までの5段階で評定する。

手続き 調査用紙は, 価値・行動意図プリテストと価値・行動意図ポストテストの間に評価テストが挿入された。具体的な提示順は, 価値プリテスト, 行動意図プリテスト, 評価テスト (不平等評価テスト, 感情評価テスト, それに理由評価テストのいずれか1つ), 価値ポストテスト, 行動意図ポストテストの順であった。3種類の調査用紙を被験者にランダムに配布した

結果, 不平等評価テストを含む調査用紙が配られた不平等評価群 (統制群), 感情評価テストを含む調査用紙が配られた感情評価群 (実験群), 理由評価テストを含む調査用紙を配られた理由評価群 (実験群) の3群が構成された。調査用紙の最初には, 学年, 学科それに名前を記入する欄を設けた。被験者には, 名前の記入は再度調査する際に個人を同定するために必要であること, データは科学的研究の目的にだけ用い, 成績評価には何ら関係がないことを口頭で伝えた。テストの時間管理は, ストップウォッチを用いて実験者が行った。実験者は, 最初のプリ価値テストとプリ行動意図テストを全員が終了したことを確認した後, 評価テストの進め方について説明し, それから各価値実現について Appendix のアの課題を行うよう述べ, 90秒間経った時点でイに進むよう教示した。

結果と考察

価値プリテストにおける185名の評定平均値は, 「社会的権力」と「大胆さ」が2.93及び3.78と低く, 「援助的」と「健康」が4.41及び4.57と高い値であった (t検定の結果は, いずれも他の項目より1%水準で平均値が高い又は低いことを示した)。行動意図プリテストにおける185名の評定平均値は, 「体の調子が悪いときは, すぐに病院へ行く」と「他者の意向より, 自分のやりたいことを優先する」が1.61及び1.78と低く, 「自分の資質向上のチャンスがあれば, 積極的に利用する」と「目的を達成するためには, 少々の危険にも挑戦す

Table 1 Increment in the coefficient of determination (R^2) and the standard partial regression coefficient (p) when experimental or control variables were introduced (Immediate values post-test condition)

	degree of inequality (control variables)	degree of pleasure (experimental variables)	degree of reasoned assent (experimental variables)
	R^2 increment (p)	R^2 increment (p)	R^2 increment (p)
Social power	.001 (.038)	.064 (.269) **	.102 (.319) ***
Capable	.000 (.003)	.001 (-.045)	.013 (.121)
Daring	.001 (-.040)	.110 (.363) ***	.098 (.342) ***
Freedom	.001 (.026)	.128 (.489) ***	.186 (.436) ***
Protecting the environment	.011 (-.105)	.163 (.422) ***	.181 (.295) ***
Helpful	.017 (-.131)	.136 (.401) ***	.248 (.601) ***
Obedient	.000 (-.008)	.223 (.493) **	.051 (.252) **
Health	.001 (.032)	.062 (.285) **	.246 (.510) ***

: p < .01, *: p < .001

る」が2.60及び2.18と高い値を示した（いずれも他の項目より1%水準で異なることを示した）。価値テストにおいて、「援助的」と「健康」が重視されたのは、実験参加者の所属大学が、健康・福祉を中心に「ヒューマンサービス」を理念として掲げているため、その影響が現れた可能性がある。一方、行動意図レベルでは個人的成長や自己実現が重視されており、価値と行動との関係は単純ではないことを示している。

価値ポストテストを従属変数、価値プリテストと評価テストを独立変数とする場合の、評価テスト導入による決定係数 (R^2) の増分と標準回帰係数 (P_2) が Table 1 に示してある。不平等評価群の場合、全ての価値項目において、不平等の評価による価値ポストテストへの影響は認められなかった。このことから価値実現における女性にとっての不平等を被験者に尋ねる手続きは、価値変容における統制群の操作としては適切であったと考えられる。一方、感情評価群では、「社会的権力」、「大胆」、「自由」、「環境保全」、「援助的」、「分をわきまえる」、「健康」の7価値指標において、評価テスト導入の影響が有意で（順に $F(1,59) = 7.32, 13.78, 16.17, 21.40, 13.05, 28.88, 9.89$; いずれも $p < .01$ ）、標準偏回帰係数の平均も.39と高い値であった。ただし、「有能さ」に関しては有意な R^2 増分は認められなかった。理由評価群に関しても、感情評価群と同様に「有能さ」を除く、上記7価値指標において有意な決定係数 (R^2) の増加が認められ（順に $F(1,59) = 11.38, 11.93, 16.80, 28.96, 17.87, 8.40, 24.60$; いずれも p

$< .01$ ）、標準偏回帰係数の平均も.39であった。これらの結果は、感情焦点化直後及び理由分析直後の価値変容に関して、仮説1)と仮説2)のいずれも支持するものである。即ち、統制群とは対照的に、感情評価群と理由評価群のいずれにおいても、実験的操作が価値指標の重要さの認知に影響を与えることが示された。感情評価群の場合は、ある価値の実現を達成できた場合の嬉しさが大きいほど、その価値が重要であるという方向に価値認知が変化した。また理由評価群では、ある価値実現の重要性についての理由が被験者にとって納得がいくほど、その価値は重要であるという方向に認知が変化した。

実験 2

実験2では、実験1の2ヶ月後に、同じ被験者に再度価値テストを行うことで、2ヶ月前の感情評価と理由評価の直後に現れた価値変容が持続しているかどうか、両操作間で価値変容の持続効果に差異があるかどうかを調べる。また、実験1の結果も含めて、感情評価と理由評価が価値と行動意図の一致性に及ぼす影響について検討する。更に、価値のみでなく、行動意図に影響を及ぼす他の要因の効果を検討することで、将来の価値変容と行動変容の関係についての基礎資料を得ることを目的に加えた。

方法

被験者 実験1の2ヶ月後に、心理学を受講する実

Table 2 Increment in the coefficient of determination (R^2) and the standard partial regression coefficient (p) when experimental or control variables were introduced (delayed values post-test)

	degree of inequality (control variables)	degree of pleasure (experimental variables)	degree of reasoned assent (experimental variables)
	R^2 increment (p)	R^2 increment (p)	R^2 increment (p)
Social power	.000 (.015)	.012 (.113)	.094 (.309)
Capable	.031 (-.177)	.030 (.176)	.171 (.419) **
Daring	.002 (-.048)	.008 (.103)	.000 (-.011)
Freedom	.022 (-.148)	.146 (.390) **	.150 (.394) **
Protecting the environment	.031 (-.176)	.089 (.314) *	.037 (.203)
Helpful	.049 (-.226)	.004 (.070)	.010 (.116)
Obedient	.006 (.081)	.047 (.230)	.067 (.266)
Health	.030 (.142)	.029 (.194)	.009 (-.095)

** : $p < .05$, *** : $p < .01$

Table 3 Value-behavioral intension consistency shown by correlation between the scores of value test and behavioral intension test in pre-test, immediate post-test and delayed post-test

Condition		Social Power	Capable	Daring	Freedom	Protecting the environment	Helpful	Obedient	Health
Control	pre	-.033	.129	.101	-.077	.398**	.297*	.275	.168
	Immediate	.093	.168	.176	-.127	.603**	.331*	.102	.065
	delayed	.196	.159	.286	-.060	.315**	.372**	-.082	.082
feeling	pre	.191	-.065	-.096	-.229*	.347**	.119	.042	.078
	Immediate	.124	-.104	.436**	-.024	.445**	.408**	.128	.033
	delayed	.399**	-.161	.407**	.136	.349**	.221	-.296*	.325**
reason	pre	.210	-.109	.190	.017	.470**	.244*	.095	-.124
	Immediate	.372**	.016	.360**	.236**	.375**	.474**	.043	.042
	Delayed	-.077	-.104	.292	.098	.510**	.002	.204	-.192

*: $p < .05$, **: $p < .01$

験1と同じ学生を被験者とした。調査用紙回収後に、実験1と実験2で被験者が記入した氏名により、被験者の同定を行った。実験1の被験者の中には実験2の授業で欠席した人がいたので、不平等評価群は46名、感情評価群が45名、理由評価群は39名となった。

測度 実験1で用いられた価値テスト、行動意図テストの他に次のテストを加えた。(a) 価値-行動関連(value-behavior connection)テスト:このテストは、例えば行動意図テストの「特定の集団のリーダーになる」という行動が、価値テストの「社会的権力(他者を統制する、支配する)」という価値実現のためにどの程度重要であるかを「全く大事ではない」から「とても大事」までの5段階で評定するものである。(b) 行動容易性(accessibility of the behavior)テスト:このテストは、行動意図テストの各項目について被験者が「実行しようと思えば簡単にできることかどうか」を「とてもむずかしい」から「とても簡単」までの5段階で評定するものである。

手続き 調査用紙は全ての被験者に対して同じ内容であり(価値テスト、行動意図テスト、価値-行動関連テスト、行動容易性テストの順に提示された)、最初に学年、学科、氏名の記入欄があった。用紙は一斉に配布・回収した。

結果と考察

2ヶ月後の価値テストを従属変数、実験1での価値プリテストと評価テスト(不平等評価テスト、感情評価テスト、理由評価テストのいずれか1つ)を独立変数とした場合の、評価テスト変数導入による決定係数

(R^2)の増分および標準偏回帰係数がTable 2に示してある。不平等評価群(統制群)については、実験1と同様に全ての価値指標について有意な決定係数の増加は認められなかった。感情評価群に関しては、「自由」($F(1,42) = 7.98, p < .01$)、「環境保全」($F(1,42) = 5.92, p < .05$)の2価値指標においてのみ有意な決定係数の増加が認められた。理由評価群では、「社会的権力」($F(1,36) = 4.20, p < .05$)、「有能さ」($F(1,42) = 8.36, p < .01$)、「自由」($F(1,36) = 6.53, p < .05$)の3価値指標において有意な決定係数の増加を認めた。これらの結果は、両実験群における操作の影響は2ヶ月後にかなり低減するが、一部の価値指標については依然持続することを示している。

価値と行動意図の一致性の指標として、価値変数と行動意図変数間の相関を求めた。統制群、感情評価群、理由評価群それぞれについて、実験1で行ったプリテストと直後(immediate)ポストテストおよび実験2の遅延(delayed)ポストテストにおける価値と行動意図間の相関をTable 3に示す。コントロール群では、「環境保全」と「援助的」がプリテスト、直後ポストテストそれに遅延ポストテストのどの時点でも価値と行動意図間の一致性があり、テスト時期の違いによる一致性の変化はほとんど見られなかった。感情評価群では遅延ポストテストにおいて価値と行動意図間の一致性のある項目が最も多かった。理由評価群では直後ポストテストで一致性のある項目が増大するが、遅延時点ではほとんどの項目で一致性が消失した。感情評価群と理由評価群のいずれにおいても「環境保全」において一貫した価値と行動意図の一致性が示された。

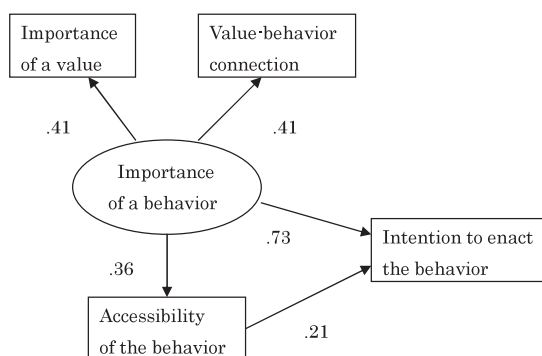


Figure 1. Path diagram; some factors influencing behavioral intentions.

これらの結果は、仮説2)に有利な結果である。感情評価群では直後に3つあった価値-行動意図間の高い一致性は、2ヶ月後に4つに増加した。一方、理由評価群では、直後に5つの価値で高い一致性が見られたものの、2ヵ月後には1つに減少した。両者の傾向に統計的な違いがあるかどうか明確ではないが、少なくとも、強く納得した価値重要性の理由は、正確な認知的根拠となり得るといふ仮説1)は本研究では支持されなかった。

行動意図テストを依存変数とした場合、価値テスト、価値-行動意図関連テストそれに行動容易性テストの3変数がどのように関わるかを示す複数のモデルについて共分散構造分析を用いて検討した。その結果、もっとも適合度の高かったパス図はFigure 1の通りである。カイ2乗によるモデルの検証では、「社会的権力」において、モデルからのずれが有意であったが、それ以外の7つの価値に関しては、確率水準は.25～.83の範囲で、モデルとして受容できることを示した。またGFIは.991～1.00、RMSEAは.000～.106の範囲で、高いモデル適合性を示した。

全体的考察

本研究は、ある価値を実現した時の喜びの感情分析が、価値変容をもたらすという先行研究(Hirose, 2004)、それに価値の重要さの理由を分析することが被験者に価値変容をもたらすというMaio & Olson (1998)の研究に基づき、価値変容に及ぼす感情と認知という両内省の影響を検討した。また統制群には、ある価値を実現することが女性にとってどの程度不平等であるかを尋ねた。実験的操作直後の価値変容を見た実験1の結果は、統制群で全く価値変容の効果がないのに対し、感情評価群と理由評価群のいずれにおい

ても、実験的操作が価値変容の効果を持つことが確かめられた。感情評価群の価値変容効果に関しては、先行研究(Hirose, 2004)に比べ統制群との対比が明確で、より強く仮説が支持された。この理由としては、先行研究の価値指標が20個あったのに対して、本研究は8個と項目が少ないことが考えられる。項目が少ない分、前の評価等の記憶が保持されやすいので、価値認知と感情間の葛藤に気づきやすく、価値判断が感情評価の影響を強く受けたと考えられる。理由評価群の価値変容効果に関しても、理由についての納得の程度が高いほど、価値の重要さも高くなる方向に変容するという結果が得られた。Maio & Olson (1998)は、価値評価の変動の増大から、間接的に価値の重要さの理由について被験者が納得する場合とそうでない場合があることを推測しているが、本研究は、その推測を直接確かめたことになる。2つの実験群の結果は、2種類の異なる内省が直後の価値判断に大きく影響すること、即ち価値変容を引き起こすことを示している。

実験2は、実験1で見出された価値変容効果の持続を確認するため実施した。結果は感情評価群と理由評価群の両群とも、実験1の評価による価値変容効果が急速に薄れることが示された。このことは、理由分析と感情焦点のどちらがより正確な価値評価に導くかという仮説1)と仮説2)の論点に関して、明確な結論を与えることができないばかりか、両分析とも、表面的で一時的な価値変容しか引き起こさなかった可能性をも示唆するものである。しかしながら、価値変容が持続しなかった他の理由も考えられる。Rokeach (1973)の研究では、価値変容が長期間持続することが見出されているが、この背景として、彼らの研究では「自由」と「平等」の2つの価値に焦点をあて、資料等を提示し、時間をかけて被験者の価値変容を引き起こしていることがあげられる。本研究では、8個の価値が用いられ記憶の忘却が起こりやすく、また、わずか90秒の価値実現の自己感情や理由の分析であり、情報の記録が十分でないこと等が多くの価値変容が持続しなかった理由の一つとして考えられる。また、Rokeach (1973)の研究では、価値変容の強い動機となる自己矛盾が起こるよう第3者が積極的に働きかけている。本研究の被験者は、認知と感情あるいは認知間の不一致は体験するかもしれないが、それは自己分析によるもので、外部から自分の認知的枠組みが強く揺さぶられる体験とは異なる。このような動機づけの違いも本研究で価値変容が持続しなかった背景としてあげられる。その意味では、わずか90秒の自己分析で、

いくつかの価値指標において、価値変容効果が持続したことは、軽視できない結果である。今後は、記憶負担の軽減等を実施した上で、価値変容の持続の有無を確認する必要がある。

更に実験2では、仮説1)と仮説2)との論点において理由分析と感情焦点のどちらが、価値と行動意図の一致性を高めるかを検討した。結果の傾向の質的違いから、理由分析よりも価値実現の喜びに焦点をあてることが、その人本来の(正確な)価値の気づきをもたらす可能性が示唆された。しかも、理由についての納得の程度が高くて、価値-行動意図の一貫性は高くないという本研究の結果は、理由評価群で認知的基盤が形成され易いという、Maio & Olson (1998)の仮説とは一致しない。

実験2の第3の目的は、行動意図に影響を及ぼす価値以外の要因の効果を検討することで、価値(又は価値変容)がどのようなプロセスを経て行動(又は変容)に影響を及ぼすかを明らかにすることであった。価値は行動を選択する基準なので、特定の価値に動機づけられた行動は数多く存在する。人は自己にとって重要な価値に関わる行動の全てを実行するわけではなく、また行動の遂行は価値によってのみ規定されるわけでもない。価値と行動の間には様々な要因が介在している可能性がある。Figure 1から、価値の重要性、価値-行動連関それに行動容易性の各変数が行動意図を規定する重要な要因であることが理解できる。更にこのモデルは、価値の重要性変数と価値-行動連関変数は独立して行動意図を規定するのではなく、両者が結合した潜在変数が強く行動を規定することを示している。著者はこの潜在変数を「行動の重要性」と命名した。言い換えれば、ある行動の発現は、それが自己にとって容易であるかどうか、また重要かどうかによって決まる。そして後者の重要性は、行動の背景にある価値が個人にとって重要かどうか、及びその行動が価値の実現に貢献するかどうかによって規定される。

本研究の結果は、価値変容の研究・実践を進める上で考慮すべきいくつかの課題を提示した。価値観の変容は、個人にとって大きな出来事である。人は人生上の大きな体験を通して自分にとって真に大切なものを見出す。人生そのものが価値探求のプロセスと言える。しかし自分の体験だけから価値変容が起こるわけではない。生き方を変える本や人との出会いもある。Maio & Olson (1998)とHirose (2004)の研究は、人は自己の価値体系について日頃十分に自覚し、吟味しているわけではないことを示唆している。本研究の

方法は、強い自己矛盾や欲求不満が引き起こさずとも、望ましさに関する自己の信念についての、「攪乱」(Wright, Watson, & Bell, 1996)が生じる可能性を示唆している。システムでは変化に抵抗し、元の平衡状態に戻ろうとする力が働く一方で、わずかな「攪乱」が変化への動きに適合し、全体を大きく変えることもある。2ヶ月後にほとんどの価値変容が消失したにしても、いくつかの価値については回復力を超えた力が働いたかもしれない。「攪乱」の効果を拡大し、持続するには、被験者の内的プロセスを言語化し、外在化する必要がある。もし、そのような状況が確保された場合、その人の価値判断にどの程度の影響を与えるかは研究してみる価値があるかもしれない。

引用文献

- Boninger, D. S., Krosnick, J. A., & Berent, M. K. (1995). Origins of attitude importance: Self-interest, social identification, and value relevance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 61-80.
- Hermans, H. J. M. (1987). Self as an organized system of valuations: Toward a dialogue with the person. *Journal of Counseling Psychology*, 34, 10-19.
- Hirose, H. (2004). Changes in values cognition after rating values-associated feelings. *Japanese Psychological Research*, 46, 115-120.
- Katz, I., & Hass, R. G. (1988). Racial ambivalence and American value conflict: Correlational and priming studies of dual cognitive structures. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 893-905.
- Maio, G. R. & Olson, J. M. (1995b). Relations between values, attitudes, and behavioral intentions: The moderating role of attitude function. *Journal of Experimental Social Psychology*, 31, 266-285.
- Maio, G. R. & Olson, J. M. (1998). Values as truisms: Evidence and implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 294-311.
- McGuire, W. J. (1964). Inducing resistance to persuasion: Some contemporary approaches. In L. Berkowitz (ED.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.1, pp.191-229). New York:

Academic Press.

Rogers, C. R. (1940) . The process of therapy.

Journal of Counseling Psychology, 4, 161-164.

Rokeach, M. (1973) . *The nature of human values*. New

York: The Free Press.

Schwartz, S. H. (1992) . Universals in the content

and structure of values: Theoretical advances
and empirical tests in 20 countries. *Advances in
Experimental Social Psychology*, 25, 1-65.

Wilson, T.D., Dunn, D.S., Bybee, J.A., Hyman, D.B., &

Rotondo, J.A.(1984). Effect of analyzing reasons
on attitude-behavior consistency. *Journal of
Personality and Social Psychology*, 47, 5-16.

Wilson, T.D., & Dunn, D.S (1986). Effects of

introspection on attitude-behavior consistency:
Analyzing reasons versus focusing on feelings.
Journal of Experimental Social Psychology, 22,
249-263.

Wilson, T.D., Kraft, D., & Dunn, D.S. (1989) . The

disruptive effects of explaining attitudes: The
moderating effect of knowledge about the
attitude object. *Journal of Experimental Social
Psychology*, 25, 379-400.

Wright, L.M., Watson, W.L., & Bell, J.M. (1996) .

Beliefs. New York: Basic Books. (ライト, L. M.,
ワトソン, W.L., & ベル, J.M. 杉下知子 (監訳)
(2002). ビリーフ 日本看護協会出版会)

Appendix

Example of an assessment test in the 3 groups: assessment of the value "social power"

不平等評価テスト：コントロール群 (Inequality-assessment test: control group)

ア 現代社会で女性が次のような価値実現を進める上で、社会的に不平等な面があるか考えて下さい・・・90秒間 (What is the level of inequality for women in actualizing the following value in modern society---90 seconds)

他者が自分に従うような地位につく[社会的権力]
(Achieve a position in which you control others [social power])

イ その考えた結果について、次の5段階のどれかに○をつけて下さい (Please mark one of the following 5 grades with ○, to indicate your opinion of the degree of inequality) .

not unequal at all	not very unequal	unsure	somewhat unequal	very unequal

感情評価テスト：実験群 (Feeling-assessment test: experimental group)

ア 将来あなたが次のようなことを実現できた場面を想像して下さい・・・90秒間
(Please imagine that you experience the following situation ---90 seconds)

他者が自分に従うような地位につく[社会的権力]
(Achieve a position in which you control others [social power])

イ そのようなことが起こったら、どの程度嬉しいですか、次の5段階のどれかに○をつけてください
(Please mark one of the following 5 grades with ○, to indicate the degree of pleasure you would feel)

not happy at all	not very happy	unsure	somewhat happy	very happy

理由評価テスト：実験群 (Reason-assessment test: experimental group)

ア 将来、次のことを実現することが、あなたにとって重要である理由を考えてください・・・90秒間
(Please assess your reasoned assent to the importance of actualizing the following value item ---90 seconds)

他者が自分に従うような地位につく[社会的権力]
(Achieve a position in which you control others [social power])

イ その理由はあなたにとって納得できるものでしたか、次の5段階のどれかに○をつけてください
(Please mark one of the following 5 grades with ○, indicating your degree of reasoned assent)

do not assent at all	moderate lack of assent	unsure	moderate assent	complete assent